

金塚友之丞『蒲原の民俗』 長苗の話

新潟市中央区から関屋分水を越えた西区青山に、いま田んぼは1枚もないが、かつては名だたる湛水田(※)だった。砂丘列上にある越後線青山駅あたりの標高はおよそ15m、地名に「山」と付くのに意外だろうが、砂丘列南側のイオン青山店あたりはマイナス40cmだ。さらに南に行くと平島があり、信濃川に合流する西川で区切られる。西川の自然堤防が標高1mくらいに育って水位も高く、ここからは容易に水を抜くことができない。東側の信濃川は、大河津分水も関屋分水もない時代は西川を度々逆進するほど水位が高いから、砂丘、西川、信濃川三方を囲まれた青山、平島は、暮らすには厳しい窪地だった。

そんな土地の田んぼで、田植えをする際には「半身構えでうでを思い切り伸ばしても、上向けた口へ水が入ったり、笠の後縁が水に浮いたりして困った」という。足がどの程度泥に沈んでいたかは不明だが、50cmくらいの水位はあったろう。

田植え機にセットできるようなサイズの苗では水没してしまうから、30~50cmまで伸ばした長苗を使う。それでも水没する田んぼへは、「サンベ」と呼ばれる水たまりに置いて更に伸ばす。これを肩に担いで運ぶと片側が地面についたほどだったというから、今の稲刈り時期の稲より長い苗を植えたことになる。植物の可塑性に驚かされるのは、機械の融通の効かなさに慣らされているということでもあるのだ。品種も今よりずっと多様だった。

青山平島間の往来は舟だったという。念のため明治以降の幾つかの地図を確認したが、このあたりに湖沼の記載は一つもなかった。「地図にない湖」と呼ばれたのは中蒲原郡の亀田郷、阿賀野川と信濃川と小阿賀野川に囲まれた地域だが、そこに限った話ではない。

明治21(1888)年には西蒲原郡青山村、平島村ともに合併して下坂井輪村となる。この時、青山村は24戸195人。吹けば飛ぶような寒村だ。いまの住宅街は、かつてと地形が変わったわけではない。二つの分水路と排水機場が機能しなければ、瞬く間に元通りになる。

※金塚友之丞「蒲原の民俗」は新潟県民俗学会機関誌『高志路』の連載(11年間)をまとめたもの。田植えについては1961年に4回に渡って連載している。

詳しくは <https://jizoh.info/kai/87/>

※一年中水が引かない田んぼ

